

【講演会等報告】

北方諸民族の音の文化：シベリアのフィールドから
ユリ・シェイキン氏講演会

枅谷隆男

開催日：2008年5月27日（土） 14：00～17：00

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：ユリ・シェイキン氏（国立極地芸術文化学院教授）

主催：北海道民族学会・北海道大学文学研究科北方研究教育センター（共催）

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

講師紹介

最初に谷本一之氏より講師紹介があった。ユリ・シェイキン氏は、長年に渡りシベリア諸民族の音楽研究を積み重ね、その功績が認められ2007年度「第19回小泉文夫音楽賞」を東京で受賞した。東京以外での小泉賞受賞記念講演は今回初めてとなる。同賞は民族音楽学者・小泉文夫氏の遺族が基金を拠出し、民族音楽分野で優れた業績を表彰する国際賞で、ロシア人としては初受賞となる。なお、谷本氏は講師と長年研究交流があり、第8回の同賞を受賞している。

講師は1992年1月、札幌天神山国際ハウスで行われた「北方民族芸能祭」でも来日、報告者も参加したが、これ以前は旧ソ連の研究が公開されることは無く、画期的なシンポジウムであった。レニングラード大でウデへの音楽分類で修士論文を提出、シベリア諸民族の研究を進め、ノボシビルスク音楽院で教鞭を取り優秀な民族音楽研究者を育てた。氏はサハ共和国文化副大臣としてヤクーツク大に音楽コースを設置し、音楽分野で最も権威のある事典『ニューグロヴ世界音楽大事典』のロシア関連全章を執筆するなど、ロシア民族音楽研究の大御所である。

講演要旨

講演はロシア語で行われ、共催の北大文学研究科北方研究教育センター助教・森永貴子氏が通訳をした。シベリア（北アジア）とは、西はウラル山脈からアルタイ山脈、東は太平洋、北極海に至る広大な地域である。地図を使いシベリアを北東、北西、西、南西、南部中央、南東の7地域に分けて、氏の45年間の研究成果である豊富な音声と写真資料、そして楽器の実演も交えながらシベリア諸民族の音楽の特徴を詳しく解説した。

北東部は古アジア民族地域で、チュクチ、アリユート、ユカギールなどが生活する。最初に、サモエドの喉をガラガラさせる独特の歌唱法『喉歌（喉鳴らし遊び）』の録音が示された。樺太アイヌの喉歌『レクッカラ』に酷似すると報告者は感じた。口琴は歌に近い音色で、元は海岸で採取した骨や竹で作り、現在は鉄で作られている。柄のついたベーリング式タンバリンは、パントマイムを伴って演奏される。次にコリヤーク最後の伝承者による歌唱『カラスの旋律』が紹介された。

中央部はヤクーチャ（サハ）があり、ツングース・ヤクーチャンと分類でき、エヴェンキ、ヤクート、エヴェンなどが分布する。この地域は歌をはさんだ叙事詩的組曲を、身体を揺らしながら踊るのが特徴である。次に鉄製口琴を実演しながら、その歴史と名称を説明した。「北方民族芸能祭」でも演奏した腕前は確かで、旋律と同時にカッコウの鳴き声を出すテクニックは素晴らしかった。最古の口琴は日本で発掘され（報告者注：埼玉県氷川神社で平安時代の鉄



講演会風景



口琴を演奏するシェイキン氏

製口琴が 2 点出土)、その名称は朝鮮半島では音楽を意味する「コモン」から「コモンゴ」と呼ぶ。古代中国では口琴の音は男性の声を表わして女性のみが演奏し、「テギン・コブズ」(王子の弦楽器)と呼ばれる。

北西部はネネツ、ヌナガサンなどのサモエードと、ケット、ユエグなどのエニセイ・グループに分けられる。6 時間に及ぶという『アイマシエータの叙事詩』の一部が紹介された。

西シベリアはハンティ・マンシの白鳥型ハープ『白鳥の声』が紹介された。(報告者注: 数年前来札したハンティ・マンシは、樺太アイヌのトンコリに似た弦楽器も演奏した) 口琴の音と杵太鼓の写真が示された。南西部はチュルク系民族が分布し、アルタイからサヤンの山脈地域にある。4 時間を要する二弦琴と喉歌の叙事詩の一部が紹介された。ハカスの叙事詩では、日本の箏に似た楽器を使用している。札幌では 10 年ほど前にハカスのハイ(喉歌)と、チャトハン(箏)の演奏会が行われていて、報告者も鑑賞している。サヤンでは、シャーマンの太鼓の柄に顔の形が描かれている。木管の遊牧民の女性が吹く草笛は、たくさんの倍音を使い息の音も特徴的である。

南中部にはブリアートとトゥバがあり、サヤン・バイカル地域といえる。ラマ教の影響が色濃い。音声資料の西ブリアートの合唱は、ブルハニズム(仏教様式)で独唱者の音程が極めて高い。トゥバの歌唱は器楽的特徴を持つ『喉歌』が紹介されたが、こちらは基音と倍音(周波数の n 倍音)を同時に発声する倍音唱法である(報告者注: 喉歌は広く極東に分布し、アルタイのカイ、トゥバのホーメイ、モンゴルのホーミーなどがあり、仏教の声明、日本の浪曲や市場のせり声の発声に似る)。

南東部はアムール・サハリン地域である。オロチの熊送り儀礼に使われる『カラスの音』は丸太の打楽器の音声が示され、休符を伴うリズムが特徴の杵も打奏するシャーマンの太鼓は実演も交えた。シャーマンの儀式ではその参加者も一緒に演奏し、映画『デルス・ウザーラ』でも同じリズムが出てくるという説明があった。16 歳のときシェイキン氏は、ニブフの音楽とともにアイヌ音楽にも触れ、その時聞いたサハリン・アイヌの歌『ヘンドレ・ヘンドレ・ホワイ』を実演した。最後にニブフの子守唄が紹介されたが、その人が古い伝統の最後の継承者だった。内容は「13 歳の女子が出産したが、まだ乳が出ないので赤ん坊に歌を歌っている」というものである。

質疑応答・謝辞

質疑応答はとても活発に行われた。その一部を紹介すると、太鼓の皮と枠の材質はチュクチでは、①アザラシ皮＋流木 ②トナカイ皮＋白樺 ③ジャコウジカ＋柳 ④トナカイ、ウマ＋白樺 ⑤トナカイ、ウシ＋松の組合せがある。北西地域の太鼓に刻まれる顔は、トラや雄ウシなど強者の象徴で太鼓の主人を表わす。調律は皮を濡らして音程を下げ、火であぶって上げ、歌のための音叉の役割を持つ。音声資料の演唱者は高齢者が多く、120人のうち生存者は2人のみである。

最後に谷本氏から謝辞の際、二つの重大発表があった。それは、シェイキン氏が長年収集した膨大な楽器コレクションを北海道立北方民族博物館に寄贈すること。そして、館長である谷本氏も同じくコレクションを同館に寄贈し、世界で唯一北方研究に特化している館を楽器博物館として機能させることである。民族音楽を研究する一人として、貴重なシベリア諸民族の音声資料とその権威者から直接講演を受けたと同時に、エキサイティングな発表に同席できたことに感謝する。

(ますや・たかお／北海道札幌拓北高等学校)